

第4講

教育方法の歴史

～教えと学びのパラダイムの交錯～

【学習到達目標】

- ・教育方法の歴史をつかみ、現行学習指導要領の転換が図られていることを理解し、説明することができる。
- ・現在の学習指導要領において、重要視されている学習者の主体的に学ぶ態度（自律的な学び）について、音楽科の具体例を示しながら説明できる。

1. 教育方法の歴史としての行動主義的学習観について

（1）教育方法の歴史の概観

「教育とは何か」、と問われると、どのような解を思い浮かべるだろうか。「学ぶとは何か」と問われると、どうだろうか。「教える」と「学ぶ」は、同じなのか、異なるのか。解は、簡単なようで簡単ではない気がする。「教育」を「教え」「育む」と分けて考えることもできる。「教える」行為は、その歴史を振り返れば、古代ギリシアまで遡ることができる。

それは、古代ギリシアの哲学者によって探究され、伝聞・口述による行為であった。古代ギリシアの著名な哲学者としては、ソクラテス、プラトン、アリストテレスを挙げることができる。ソクラテスは青年たちに金銭や名声ではなく、自分の「魂の世話」に心がけた市民としての生き方を唱えた。その中で、対話することによる「問答法」を生み出している。プラトンはアテナイの民主主義の混乱期に、国家が「正義」を実現するための理想的な国家制度を考えた。子供を素質に応じて庶民、戦士、支配者候補に振り分け、真に「知恵」を有する者を支配者にする教育制度である。アリストテレスは、知性や特性は有徳な人々と交際し、現実生活の中で習慣と反復によって身に付くと考えた。教育には実用目的のものと、人間的な教養のためのものがあるとした。

このように「教える行為」は、古代ギリシアから始まっていると言える。そこから、中世・近世・近代と時代の軸を進めていくこととなる。

近代の教育システムについて少し触れていく。近代の教育システムは、「学制」（明治5年）の近代学校制度の確立からと言ってよいであろう。

一斉授業の形式が確立され、近代欧米諸国の教育様式が取り入れられた。そこで活

躍した人物が、アメリカ人のスコット (M.M.Scott) である。スコットは、教員を養成する学校の設立にかかわるべく、召喚されたが、当時は、小学校教育の方法さえ確立されていない状況であった。そのため、スコットは、欧米の教授法をもととして小学校教育の方法を確立するとともに、生徒にこれを伝習し、師範学校教育の第一歩を踏み出した。

その後、ハウスクネヒト (Emil Hausknecht) により、ヘルバルト主義の教授理論が導入された。この教授理論は、従来の経験的な「教育論」から科学的な「教育学」へと転換している大きな役割を果たしている。ヘルバルト主義を説いているヘルバルトの教育学の特徴として、教師の経験のみで子供たちを教育していると、自分の仕事の方法や結果などを批判できなくなると考えていた。そこで、「科学的な教育学」を目指した。ヘルバルトは、よりよい教育の方法として、「管理」、「教授」、「訓練」が必要であるとしている。「管理」は、子供に直接働きかけ教育を受け入れる秩序の形成を指している。秩序形成のためには「権威」と「愛」が有効であるとされている。「教授」は、教材などの第三者を媒介とした陶冶であるとしている。「訓練」は、陶冶の意図をもって子供の心情に直接働きかけることであり、これこそ、教育の主要な部分であると説いている。ヘルバルトは教授の過程として、「四段階教授法」を打ち出している。教授を「明瞭」、「連合」、「系統」、「方法」の四段階に区別した考え方である。「明瞭」は、ここの対象を明瞭に見る段階であり、「連合」は、明瞭により得た表象どうしを連合させる段階、「系統」は、連合された表象を秩序立てて系統付ける段階、「方法」は、系統を発展させ、新しい文節を生産し、応用する案解としている。このような四段階教授法は、現代の「単元学習」につながるものであるとされている。

このように明治5年の学制より始まった日本の近代教育制度であるが、大正時代に入ると、画一的、形式的な授業への批判が高まり出した。そのような中、他律的な教授から、自律的な学習への転換が図られ、動的な教育であり、児童中心の教育が行われるようになった。このような、明治からの大きな流れの中、戦後には、昭和22年には、「学習指導要領試案」が作成され、学校の自主的教育課程編成の手引きとされた。その中で、カリキュラムや授業の創造が行われるようになっていった。

(2) 行動主義的学習理論

日本において戦後の教育を再建していく中、1960年代に、世界中で学校教育の在り方の見直しが行われた。その端を発したのは、当時のソ連が人工衛星スプートニク1号の打ち上げに成功したことによる。これに衝撃を受けた(スプートニクショック)アメリカでは、ブルーナー (J. S. Bruner) の『教育の過程』が注目され、その影響が日本にももたらされた。ブルーナーは、「発見学習」の考え方を提唱し、その著書の中でまとめている。この考えは、子供たちに学問の中心となる構造を発見さ

せ、結論に至る過程を子供自身にたどらせることで、「学習の仕方」が学習され、学習する能力が伸張されるとのものである。教科中心のカリキュラムの考え方でも、児童中心のカリキュラムの考え方でもない考え方で、それぞれの学問が持つ論理に寄り添うことが特徴となるため、「学問中心カリキュラム」とも言われている。このことを契機に、カリキュラム改革運動として、その後およそ 20 年間続いていくこととなった。

このカリキュラム改革運動期には、多くの教育プロジェクトが登場してくる。その基礎論となったのは、既存の心理学理論であった。特にこの年代での心理学の理論は、「行動主義心理学」と「認知主義心理学」がある。

「行動主義的学習論」に代表されるのは、スキナー（Skinner）である。行動主義的学習論の考えの根底には、学習は普遍的な原理によって支配されており、この原理は、学習者側からの意識的な制御から独立しているという考えがある。人間の行動は予測可能であり、捉えることができると考えており、感情、態度や意識などといった計測できないものは、観察しようとしなないところがある。

スキナーは、「スキナー箱」を使ってマウスやハトを用いて研究を開始した。この「スキナー箱」とは、マウスが、餌が出るレバーを押すように、自発的に行動（operate）するようになることを観察する、実験装置である。この研究により、報酬や罰などの刺激に反応して、自発的にある行動を行うように学習することを「オペラント条件づけ」と呼んだ。すなわち、「オペラント条件づけ」とは、偶発的行動に正の強化を与えるとその行動が生じやすくなることを研究し、その結果、学習は訓練によってだれにでも身につけさせることができることを、理論化したものである。スキナーは、さらにこの「オペラント条件づけ」の理論に基づき、1960 年代に「プログラム学習」を開発した。開発のきっかけとなったのは、愛娘の授業参観に行ったスキナーが、授業方法のひどさに呆れたことだ、と言われている。スキナーは「これはネズミの訓練以下の教育だ」と憤慨し、その結果開発されたのが「プログラム学習」だったという話がある。

行動主義的学習理論は、「学習とは、目に見える行動の変化」であると考え、その過程で生まれる、であろう感情や態度、意識などといった目に見えない事柄は、対象としない、考え方である。

2. 教育方法の歴史としての認知主義的学習理論について

「認知主義的学習理論」は、「行動主義的学習理論」と相対する理論であると言っても過言ではない。「行動主義的学習理論」において、目に見えないブラックボックスとして扱わなかった感情や態度、意識なども、人間の学習を理解する上で欠かせないことであるとの考えに立つ。この理論の考えは、ブルーム（B.S.Bloom）の学習目標に関するタクソノミー（教育目標の分類学）に基づいている（第 3 講）と言える。学習



スキナーのティーチングマシーン

には、「認知的領域（思考）」と「情意的領域（感情）」、「精神運動的領域（行動）」の3つがあると主張した。認知主義的学習理論では、特に「認知的領域（思考）」に焦点を当てている。

図4-1 タキシノミー（認知的領域）



3. 教育方法の歴史としての構成主義的学習理論について

「構成主義的学習理論」は、これまでの学習理論と大きく異なることがある。それは、学習者を受動的な存在と見るか、能動的な存在と見るかという点である。従来の学習論においては学習者を、知識を流し込まれる器のような存在ととらえている。構成主義においては学習者を自ら外部に働きかけ知識をつかみとる力をもつ存在ととらえている。

このように、「行動主義」における、教える側からの受動的な学習観に対して、学習者側からの能動的な学習観を提唱するのが、「構成主義的学習理論」である。「構成主義」は、ピアジェの考えに基づき、「人が、自分がすでにもっている知識構造(シエマ)を通して、外の世界と相互作用しながら、新しい知識を得、新しい知識構造を構成すること」を、学習の定義としている。つまり、構成主義は、「人は自らのいる環境で、回りにある材料を使って行動する過程で、自らさまざまな概念や知識を学び取るのである」といった、主体的・積極的な学習観であると言える。また、「学習は個人の活動であり、学習の効果は個人の能力として評価される」、ともいう学習観でもある。

4. 教育方法の歴史としての社会構成主義的学習理論について

従来の学習論と社会構成主義の違いについて、テストを例に説明する。通常、人の手を借りてテストを受けるのは、「カンニング」と言われる。通常の学校教育の場では、わたしたちは、「他者の助けなし」で有能であること、が求められている。そう考えると、学習は、あくまで個人的なものである。

しかし、通常日常生活を考えてみる。仮に、皆さんの職場を思い浮かべたとき、あ

る研究によると、わたしたちが、仕事場で行う 90%以上の仕事は、あなたが一人で取り組むのではない、とされている。他人に知恵を借りたり、お互いにできない部分を補いあったり、得意な部分を活かしあったりして、仕事を達成している。先ほどの学校と違って、日常においては、わたしたちは、一人で「有能」であるわけではない。様々な人々と一緒に、彼らとともに「生きる」ことで、有能に振る舞っているとも言えるのである。

このように日常生活では、わたしたちは、人々とコミュニケーションをとりながら、知的に振る舞う。そして、そこで実施される学習も、決して個人の中だけに閉じているものではない。わからないときは、先達の知恵を聞く。より有能な人から、手助けを得て、知恵をもらいつつ、わたしたちは日々生きている。同じくらい有能な同僚との対話によっても、人は学ぶことができる。

例えばあなたは、「A」ということを、よく知っているとする。そして同僚は「B」を知っているとする。「A」についてよく知っているあなたと、「B」についてよく知っている同僚が対話をすれば、「C」という新しい価値、新しい知識が生まれる可能性がある。もちろん、お互いに行き着くところは同じではないかもしれないが、あなたは「A」について「より知ること」ができる。同僚は「B」について、新たな見方ができるようになる。人が集まり、何かについて話し合えば、必然的に説明をする必要に迫られる。こうして、相互に学びが深まる可能性がある。社会構成主義は、このような事例に典型的に表れている。

5. 教えと学びのパラダイムの交錯

これまで概観してきた学習理論であるが、行動主義から社会構成主義までの歴史を捉える上でのポイントは、20 世紀の学習観である行動主義・認知主義の学習観から、21 世紀に構成主義・社会構成主義の学習観へ移行し、学習を、教師が教え児童が学ぶ「受動的なもの」から、学習者中心の「能動的なもの」として捉え直すようになったということである。

基礎的な学習論である行動主義的学習論と認知主義的学習論は、「行動主義」がそのブームを終え、「構成主義」が新たな展開を見せている。しかし現在でも、従来の学習論は、プログラム学習に基づく自学自習教材やドリル学習、「構成主義」に基づく問題解決学習や発見学習など、伝統的な学習理論は、現在も領域に応じて適用され、効果をあげている。新たに、「社会構成主義」の考え方で実践する協働学習のデザイン手法として、ジグソー学習、遠隔学習、e-Learning 等、様々な学習方法も取り入れられるようになった。教育や学習の目的・価値は、時代の流れとともに変わり、普遍的なものではない。

感性の育成を育む音楽科の教科としての特性をふまえ、これら様々な学習方法のう

ち、どの方法が教科として適しているか、検討することは必要である。学習活動の質を向上させることを主眼として、教える側にとっても学ぶ側にとっても、課題と状況に応じて、新旧いろいろな理論からのアプローチを試みながら、均衡点を常に見つけ続ける、柔軟で動的な学習観をもつことが、期待されている。

【第3講 参考文献】

- 1) 岐阜女子大学編「教材開発の基礎としてのインストラクショナルデザイン」

課題

1. 教育方法の歴史としての学習観の変遷を、学習者の具体的な姿を示し、述べなさい。
2. 現在の学習観において重要視されている、学習者中心の主体的に学ぶ態度を育成する音楽科に適する学習の方法を1つ取り上げ、具体的な活動例を示して説明しなさい。